



F 13
A 39
11

岩波文庫

874

河童

芥川龍之介著

岩波書店



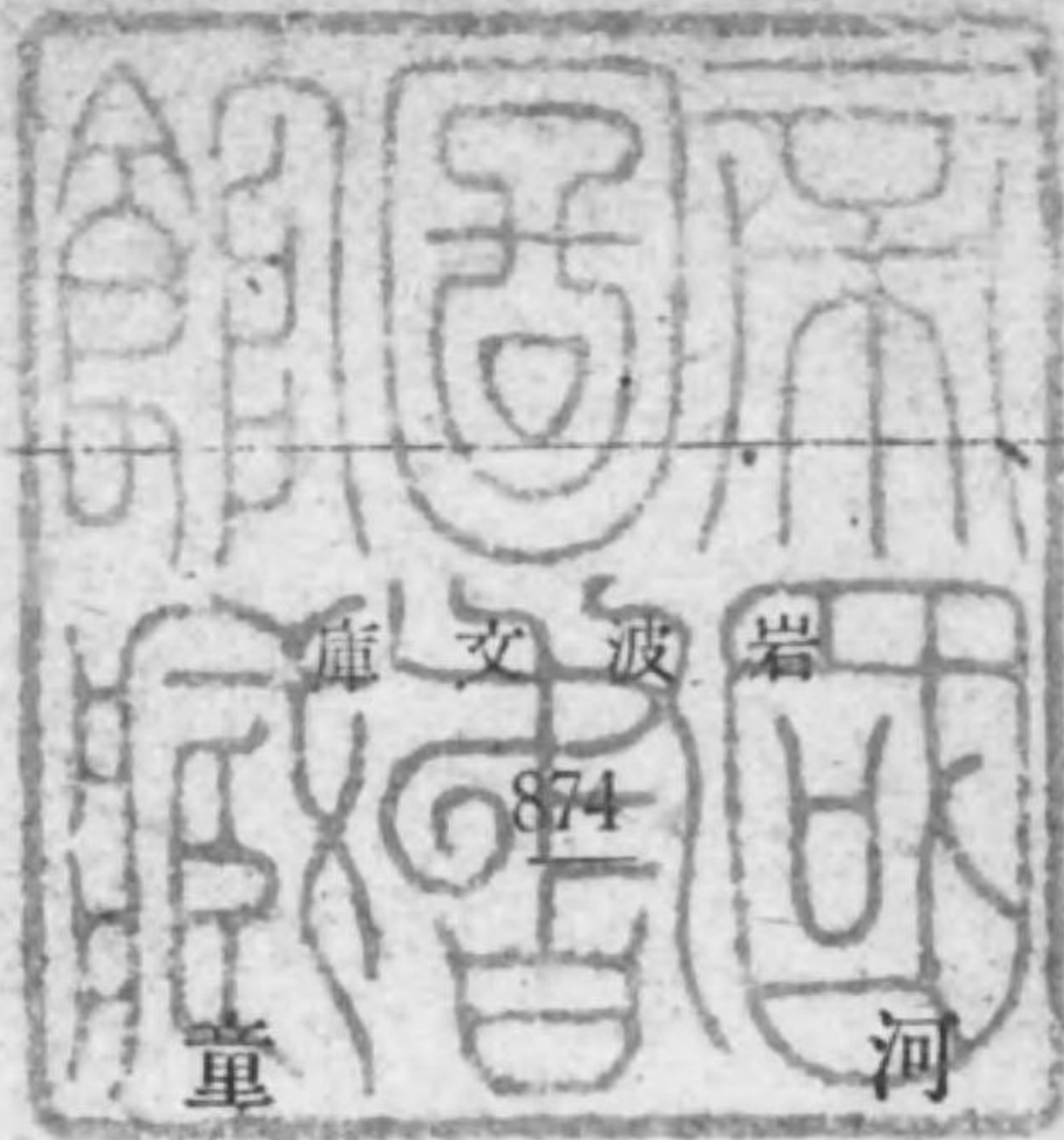
始



F13

A39

11



著介之龍川芥



~~岩~~  
~~波~~

店書波岩





河

童

カ  
ト

Kappa と發音して下さい。

これは或精神病院の患者。——第二十三號が誰にでもしやべる話である。彼はもう三十を越してゐるであらう。が、一見した所は如何にも若々しい狂人である。彼の半生の経験は、——いや、そんなことはどうでも善い。彼は唯ちつと兩膝をかかへ、時々窓の外へ目をやりながら、(鐵格子をはめた窓の外には枯れ葉さへ見えないう榎の木が一本、雪曇りの空に枝を張つてゐた。)院長のS博士や僕を相手に長々とこの話をしやべりつづけた。尤も身ぶりはしなかつた訣ではない。彼はたとへば「驚いた」と言ふ時には急に顔をのけ反らせたりした。……

僕はかう云ふ彼の話を可なり正確に寫したつもりである。若し又誰か僕の筆記に飽き足りない人があるとするれば、東京市外××村のS精神病院を尋ねて見るが善

い。年よりも若い第二十三號はまづ丁寧に頭を下げ、蒲團のない椅子を指さすであらう。それから憂鬱な微笑を浮かべ、靜かにこの話を繰り返すであらう。最後に、——僕はこの話を終つた時の彼の顔色を覚えてゐる。彼は最後に身を起すが早いか、忽ち脊骨をふりまはしながら、誰にでもかう怒鳴りつけるであらう。——「出て行け! この悪黨めが! 貴様も莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、圖々しい、うぬ惚れきつた、残酷な、蟲の善い動物なんだらう。出て行け! この悪黨めが!」

三年前の夏のことです。僕は人並みにリュック・サックを背負ひ、あの上高地の温泉宿から穂高山へ登らうとしました。穂高山へ登るのには御承知の通り梓川を溯る外はありません。僕は前に穂高山は勿論、槍ヶ岳にも登つておましたから、朝霧の下りた梓川の谷を案内者もつれずに登つて行きました。朝霧の下りた梓川の谷を——し

かしその霧はいつまでたつても晴れる景色は見えません。のみならず反つて深くなるのです。僕は一時間ばかり歩いた後、一度は上高地の温泉宿へ引き返すことにしようかと思ひました。けれども上高地へ引き返すにしても、兎に角霧の晴れるのを待つた上にしなければなりません。と云つて霧は一刻毎にすすん深くなるばかりなのです。「ええ、一そ登つてしまへ。」——僕はかう考へましたから、梓川の谷を離れないやうに熊笹の中を分けて行きました。

しかし僕の目を遮るものはやはり深い霧ばかりです。尤も時々霧の中から太い毛生樺や樅の枝が青あをと葉を垂らしたのも見えなかつた訣ではありません。それから又放牧の馬や牛も突然僕の前へ顔を出しました。けれどもそれ等は見えたとと思ふと、忽ち又遠くとした霧の中に隠れてしまふのです。そのうちに足もくたびれて来れば、腹もだんだん減りはじめ、——おまけに霧に濡れ透つた登山服や毛布なども並み大抵の重さではありません。僕はとうとう我を折りましたから、岩にせかれてゐる水の音

を便りに梓川の谷へ下りることにしました。

僕は水ぎはの岩に腰かけ、とりあへず食事にとりかかりました。コオンド・ビイフの罐を切つたり、枯れ枝を集めて火をつけたり、——そんなことをしてゐるうちに彼は十分はたつたでせう。その間にどこまでも意地の悪い霧はいつかほのぼのと晴れかかりました。僕はパンを噛じりながら、ちよつと腕時計を覗いて見ました。時刻はもう一時二十分過ぎです。が、それよりも驚いたのは何か氣味の悪い顔が一つ、圓い腕時計の硝子の上へちらりと影を落したことです。僕は驚いてふり返りました。すると、——僕が河童と云ふものを見たのは實にこの時が始めてだつたのです。僕の後ろにある岩の上には晝にある通りの河童が一匹、片手は白樺の幹を抱へ、片手は目の上にかざしたなり、珍らしいさうに僕を見おろしてゐました。

僕は呆つ氣にとられたまま、暫くは身動きもしずにおました。河童もやはり驚いたと見え、目の上の手さへ動かしません。そのうちに僕は飛び立つが早い、岩の上の

河童へ躍りかかりました。同時に又河童も逃げ出しました。いや、恐らくは逃げ出したのでせう。實はひらりと身を反したと思ふと、忽ちどこかへ消えてしまつたのです。僕は愈驚きながら、熊笹の中を見まはしました。すると河童は逃げ腰をしたなり、二三メートル隔つた向うに僕を振り返つて見てゐるのです。それは不思議でも何でもありません。しかし僕に意外だつたのは河童の體の色のことす。岩の上に僕を見てゐた河童は一面に灰色を帯びてゐました。けれども今は體中すつかり緑いろに變つてゐるのです。僕は「畜生！」とおほ聲を擧げ、もう一度河童へ飛びかかりました。河童が逃げ出したのは勿論です。それから僕は三十分ばかり、熊笹を突きぬけ、岩を飛び越え、遮二無二河童を追ひつづけました。

河童も亦足の早いことは決して猿などに劣りません。僕は夢中になつて追ひかける間に何度もその姿を見失はうとしました。のみならず足を迂らして轉がつたことも度たびです。が、大きい橡の木が一本、太ぶとと枝を張つた下へ來ると、幸ひにも放牧

の牛が一匹、河童の往く先へ立ち塞がりました。しかもそれは角の太い、目を血走らせた牡牛なのです。河童はこの牡牛を見ると、何か悲鳴を擧げながら、一きは高い熊笹の中へもんどりを打つやうに飛び込みました。僕は、——僕も「しめた」と思ひましたから、いきなりそのあとへ追ひすがりました。するとそこには僕の知らない穴でもあいてゐたのでせう。僕は滑かな河童の背中にやつと指先がさはつたと思ふと、忽ち深い闇の中へまつ逆さまに轉げ落ちました。が、我々人間の心はかう云ふ危機の際にも途方もないことを考へるものです。僕は「あつ」と思ふ拍子にあの上高地の温泉宿の側に「河童橋」と云ふ橋があるのを思ひ出しました。それから、——それから先のこととは覺えてゐません。僕は唯目の前に稻妻に似たものを感じたぎり、いつの間にか正氣を失つてゐました。

そのうちにやつと気がついて見ると、僕は仰向けに倒れたまま、大勢の河童にとり  
 圍まれてゐました。のみならず太い嘴の上に鼻目金をかけた河童が一匹、僕の側へ  
 跪きながら、僕の胸へ聴診器を當ててゐました。その河童は僕が目をあいたのを見  
 ると、僕に「静かに」と云ふ手真似をし、それから誰か後ろにゐる河童へ *Quack, quack*  
 と聲をかけました。するとどこからか河童が二匹、擔架を持つて歩いて來ました。僕  
 はこの擔架にのせられたまま、大勢の河童の群がつた中を静かに何町か進んで行きま  
 した。僕の兩側に並んでゐる町は少しも銀座通りと違ひありません。やはり毛生櫛の  
 並み木のかげにいろいろの店が日除けを並べ、その又並み木に扶まれた道を自動車が  
 何臺も走つてゐるのです。

やがて僕を載せた擔架は細い横町を曲つたと思ふと、或家の中へ昇ぎこまれました。  
 た。それは後に知つた所によれば、あの鼻目金をかけた河童の家、——チャックと云  
 ふ醫者の家だつたのです。チャックは僕を小綺麗なベッドの上へ寝かせました。それ

から何が透明な水薬を一杯飲ませました。僕はベッドの上に横たはつたなり、チャック  
 のするままになつてゐました。實際又僕の體は碌に身動きも出來ないほど、節々が  
 痛んでゐたのですから。

チャックは一日に二三次は必ず僕を診察に來ました。又三日に一度位は僕の最初に  
 見かけた河童、——バッグと云ふ漁師も尋ねて來ました。河童は我々人間が河童のこ  
 とを知つてゐるよりも遙かに人間のことを知つてゐます。それは我々人間が河童を捕  
 獲することよりもすつと河童が人間を捕獲することが多い爲でせう。捕獲と云ふのは、  
 當らないまでも、我々人間は僕の前にも度々河童の國へ來てゐるのです。のみならず  
 一生河童の國に住んでゐたものも多かつたのです。なぜと言つて御覽なさい。僕等は  
 唯河童ではない、人間であると云ふ特權の爲に働かずには食つてゐられるのです。我々に  
 バッグの話によれば、或若い道路工夫などはやはり偶然この國へ來た後、雌の河童を  
 妻に娶り、死ぬまで住んでゐたと云ふことです。尤もその又雌の河童はこの國第一の

美人だつた上、夫の道路工夫を護摩化するにも妙を極めてゐたと云ふことです。

僕は一週間ばかりたつた後、この國の法律の定める所により、「特別保護住民」としてチャックの隣に住むことになりました。僕の家は小さい割に如何にも洋酒と出来上つてゐました。勿論この國の文明は我々人間の國の文明——少くとも日本の文明などとは大差はありません。往來に面した客間の隅には小さいピアノが一臺あり、それから又壁には額縁へ入れたエツティングなども懸つてゐました。唯肝腎の家をはじめ、テーブルや椅子の寸法も河童の身長に合はせてありますから、子供の部屋に入れられたやうにそれだけは不便に思ひました。

僕はいつも日暮れがたになると、この部屋にチャックやバッグを迎へ、河童の言葉を知りました。いや、彼等ばかりではありません。特別保護住民だつた僕に誰も皆好奇心を持つてゐましたから、毎日血脈を調べて貰ひに、わざわざチャックを呼び寄せ、ゲエルと云ふ硝子會社の社長などもやはりこの部屋へ顔を出したものです。しかし

最初の半月ほどの間に一番僕と親しくしたのはやはりあのバッグと云ふ漁夫だつたのです。

或生暖かい日の暮です。僕はこの部屋のテーブルを中に漁夫のバッグと向ひ合つてゐました。するとバッグはどう思つたか、急に黙つてしまつた上、大きい目を一層大きくしてちつと僕を見つめました。僕は勿論妙に思ひましたから、「Quax, Bag, quonquel quan?」と言ひました。これは日本語に翻譯すれば、「おい、バッグ、どうしたんだ」と云ふことです。が、バッグは返事をしません。のみならずいきなり立ち上ると、べろりと舌を出したなり、丁度蛙の跳ねるやうに飛びかかる氣色さへ示しました。僕は愈々無氣味になり、そつと椅子から立ち上ると、一足飛びに戸口へ飛び出さうとしました。丁度そこへ顔を出したのは幸ひにも醫者のチャックです。

「こら、バッグ、何をしてゐるのだ?」

チャックは鼻目金をかけたまま、かう云ふバッグを睨みつけました。するとバッグ



は恐れ入つたと見え、何度も頭へ手をやりながら、かう言つてチャックにあやまるのです。

「どうもまことに相済みません。實はこの旦那の氣味悪がるのが面白かつたものですから、つい調子に乗つて惡戯をしたのです。どうか旦那も堪忍して下さい。」

僕はこの先を話す前にちよつと河童と云ふものを説明して置かなければなりません。河童は未だに實在するかどうかも疑問になつてゐる動物です。が、それは僕自身も彼等の間に住んでゐた以上、少しも疑ふ餘地はない筈です。では又どう云ふ動物かと云へば、頭に短い毛のあるのは勿論、手足に水掻きのついてゐることも「水虎考略」などに出てゐるのと著しい違ひはありません。身長もさつと一メートルを越えるか越えぬ位でせう、體重は醫者のチャックによれば、二十ポンドから三十ポンドまで、

稀には五十何ポンド位の大河童もゐると言つてゐました。それから頭のまん中には楕圓形の皿があり、その又皿は年齢により、だんだん固さを加へるやうです。現に年をとつたバツグの皿は若いチャックの皿などとは全然手ざはりも違ふのです。しかし一番不思議なのは河童の皮膚の色のこととせう。河童は我々人間のやうに一定の皮膚の色を持つてゐません。何でもその周囲の色と同じ色に變つてしまふ、——たとへば草の中にある時には草のやうに緑色に變り、岩の上にある時には岩のやうに灰色に變るのです。これは勿論河童に限らず、カメレオンにもあることです。或は河童は皮膚組織の上に何かカメレオンに近い所を持つてゐるのかも知れません。僕はこの事實を發見した時、西國の河童は緑色であり、東北の河童は赤いと云ふ民俗學上の記録を思ひ出しました。のみならずバツグを追ひかける時、突然どこへ行つたのか、見えなくなつたことを思ひ出しました。しかも河童は皮膚の下に餘程厚い脂肪を持つてゐると見え、この地下の國の溫度は比較的低いものにも關らず、(平均華氏五十度前後です。)

着物と云ふものを知らずにゐるのです。勿論どの河童も目金をかけたり、巻煙草の箱を携へたり、金入れを持つたりはしてゐるでせう。しかし河童はカンガルウのやうに腹に袋を持つてゐますから、それ等のものをしまふ時には格別不便はしないのです。唯僕に可笑しかつたのは腰のまはりさへ蔽はないことです。僕は或時この習慣をなぜかとバッグに尋ねて見ました。するとバッグはのけぞつたまま、いつまでもげらげら笑つてゐました。おまけに「わたしはお前さんの隠してゐるのが可笑的い」と返事をしました。

## 四

僕はだんだん河童の使ふ日常の言葉を覚えて來ました。従つて河童の風俗や習慣ものみこめるやうになつて來ました。その中でも一番不思議だつたのは河童は我々人間の眞面目に思ふことを可笑しがる、同時に我々人間の可笑しがることを眞面目に思ふ

——かう云ふとんちんかんな習慣です。たとへば我々人間は正義とか人道とか云ふことを眞面目に思ふ、しかし河童はそんなことを聞くと、腹をかかへて笑ひ出すのです。つまり彼等の滑稽と云ふ觀念は我々の滑稽と云ふ觀念と全然標準を異にしてゐるのでせう。僕は或時醫者のチャックと産兒制限の話をしてゐました。するとチャックは大口をあいて、鼻目金の落ちるほど笑ひ出しました。僕は勿論腹が立ちましたから、何が可笑しいかと詰問しました。何でもチャックの返答は大體かうだつたやうに覺えてゐます。尤も多少細かい所は間違つてゐるかも知れませんが、何しろまだその頃は僕も河童の使ふ言葉をすっかり理解してゐなかつたのですから。

「しかし兩親の都合ばかり考へてゐるのは可笑的いのですからね。どうも餘り手前勝手ですからね。」

その代りに我々人間から見れば、實際又河童のお産位、可笑的いものはありません。現に僕は暫くたつてから、バッグの細君のお産をする所をバッグの小屋へ見物に

行きました。河童もお産をする時には我々人間と同じことです。やはり醫者や産婆などの助けを借りてお産をするのです。けれどもお産をするとなると、父親は電話でもかけるやうに母親の生殖器に口をつけ、「お前は这个世界へ生れて来るかどうか、よく考へた上で返事をしろ。」と大きな聲で尋ねるのです。バッグもやはり膝をつきながら、何度も繰り返してかう言ひました。それからテエブルの上にあつた消毒用の水薬で嗽ひをしました。すると細君の腹の中の子は多少氣兼ねでもしてゐると見え、かう小聲に返事をしました。

「僕は生れたくはありません。第一僕のお父さんの遺傳は精神病だけでも大へんです。その上僕は河童的存在を悪いと信じてゐますから。」

バッグはこの返事を聞いた時、てれたやうに尻を掻いてゐました。が、そこに合せた産婆は忽ち細君の生殖器へ太い硝子の管を突きこみ、何か液體を注射しました。すると細君はほつとしたやうに太い息を洩らしました。同時に又今まで大きかつた腹

は水素瓦斯を抜いた風船のやうにへたへたと縮んでしまいました。

かう云ふ返事をする位ですから、河童の子供は生れるが早いから、勿論歩いたりしゃべつたりするのです。何でもチャツクの話では出産後二十六日目に神の有無に就いて講演をした子供もあつたとか云ふことです。尤もその子供は二月日には死んでしまつたと云ふことですが。

お産の話をした次手ですから、僕がこの國へ来た三月目に偶然或街の角で見かけた、大きいポスターの話をしませう。その大きいポスターの下には喇叭を吹いてゐる河童だの劍を持つてゐる河童だのが十二三匹描いてありました。それから又上には河童の使ふ、丁度時計のゼンマイに似た螺旋文字が一面に並べてありました。この螺旋文字を翻譯すると、大體かう云ふ意味になるのです。これも或は細かい所は間違つてゐるかも知れませんが、兎に角僕としては僕と一しよに歩いてゐた、ラツブと云ふ河童の學生が大聲に讀み上げてくれる言葉を一々ノオトにとつて置いたのです。

遺傳的義勇隊を募る!!!  
健全なる男女の河童よ!!!  
悪遺傳を撲滅する爲に  
不健全なる男女の河童と結婚せよ!!!

僕は勿論その時にもそんなことの行はれないことをラツプに話して聞かせました。するとラツプばかりではない、ポスタアの近所にゐた河童は、悉くげらげら笑ひ出しました。

「行はれない? だつてあなたの話ではあなたがたもやはり我々のやうに行つてゐると思ひますがね。あなたは令息が女中に惚れたり、令嬢が運轉手に惚れたりするのは何の爲だと思つてゐるのです? あれは皆無意識的に悪遺傳を撲滅してゐるのですよ。第一この間あなたの話したあなたがた人間の義勇隊よりも、——一本の鐵道を奪

ふ爲に互に殺し合ふ義勇隊ですね、——ああ云ふ義勇隊に比べれば、すつと僕たちの義勇隊は高尚ではないかと思ひますがね。」

ラツプは眞面目にかう言ひながら、しかも太い腹だけは可笑しさうに絶えず浪立たせておきました。が、僕は笑ふどころか、慌てて或河童を掴まへようと思いました。それは僕の油断を見すまし、その河童が僕の万年筆を盗んだことに氣がついたからです。しかし皮膚の滑かな河童は容易に我々には掴まりません。その河童もぬらりと迂り抜けるが早いか一散に逃げ出してしまひました。丁度蚊のやうに瘦せた體を倒れるかと思ふ位のめらせながら。

五

僕はこのラツプと云ふ河童にバッグにも劣らぬ世話になりました。が、その中でも忘れられないのはトツクと云ふ河童に紹介されたことです。トツクは河童仲間の詩人

河 退屈凌ぎに遊びに行きました。トツクはいつも狭い部屋に高山植物の鉢植を並べ、詩を書いたり煙草をのんだり、如何にも氣樂さうに暮らしてゐました。その又部屋の隅には雌の河童が一匹、(トツクは自由戀愛家ですから、細君と云ふものは持たないのです。)編み物か何かしてゐました。トツクは僕の顔を見ると、いつも微笑してかう言ふのです。(尤も河童の微笑するのは餘り好いものではありません。少くとも僕は最初のうちには寧ろ無氣味に感じたものです。)

「やあ、よく来たね。まあ、その椅子にかけ給へ。」  
トツクはよく河童の生活だの河童の藝術だの話をしました。トツクの信する所によれば、當り前の河童の生活位、莫迦げてゐるものはありません。親子夫婦兄弟など云ふのは悉く互に苦しめ合ふことを唯一の樂しみにして暮らしてゐるのです。殊に家族制度と云ふものは莫迦げてゐる以上にも莫迦げてゐるのです。トツクは或時

窓の外を指さし、「見給へ。あの莫迦げさ加減を！」と吐き出すやうに言ひました。窓の外は往來にはまだ年の若い河童が一匹、兩親らしい河童を始め、七八匹の雌雄の河童を頸のまはりへぶら下げながら、息も絶え絶えに歩いてゐました。しかし僕は年の若い河童の犠牲的精神に感心しましたから、反つてその健氣さを褒め立てました。「ふん、君はこの國でも市民になる資格を持つてゐる。……時に君は社會主義者かね？」

僕は勿論 qua (これは河童の使ふ言葉では「然り」と云ふ意味を現すのです。)と答へました。  
「では百人の凡人の爲に甘んじて一人の天才を犠牲にすることも願みない筈だ。」  
「では君は何主義者だ? 誰かトツク君の信條は無政府主義だと言つてゐたが、……」  
「僕か? 僕は超人(直譯すれば超河童です。)だ。」  
トツクは昂然と言ひ放ちました。かう云ふトツクは藝術の上にも獨特な考へを持つ

てゐます。トツクの信する所によれば、藝術は何もの支配をも受けたい、藝術の爲の藝術である、従つて藝術家たるものは何よりも先に善悪を絶した超人でなければならぬと云ふのです。尤もこれは必しもトツク一匹の意見ではありません。トツクの仲間の詩人たちは大抵同意見を持つてゐるやうです。現に僕はトツクと一しよに度たび超人倶楽部へ遊びに行きました。超人倶楽部に集まつて来るのは詩人、小説家、戯曲家、批評家、畫家、音楽家、彫刻家、藝術上の素人等です。しかしいづれも超人です。彼等は電燈の明るいサロンにいつも快活に話し合つてゐました。のみならず時には得々と彼等の超人ぶりを示し合つてゐました。たとへば或彫刻家などは大きい鬼羊齒の鉢植ゑの間に年の若い河童をつかまへながら、頻に男色を弄んでゐました。又或雌の小説家などはテエブルの上に立ち上つたなりアブサントを六十本飲んで見せました。尤もこれは六十本目にテエブルの下へ轉げ落ちるが早い、忽ち往生してしまひましたが。

僕は或月の好い晩、詩人のトツクと肘を組んだまま、超人倶楽部から歸つて來ました。トツクはいつになく沈みこんで一ことも口を利かずにゐました。そのうちに僕は火かけのさした、小さい窓の前を通りかかりました。その又窓の向うには夫婦らしい雌雄の河童が二匹、三匹の子供の河童と一しよに晚餐のテエブルに向つてゐるのです。するとトツクはため息をしながら、突然かう僕に話しかけました。

「僕は超人的戀愛家だと思つてゐるがね、ああ云ふ家庭の容子を見ると、やはり羨しさを感ずるんだよ。」

「しかしそれはどう考へても、矛盾してゐると思はないかね？」

けれどもトツクは月明りの下にちつと腕を組んだまま、あの小さい窓の向うを、一平和な五匹の河童たちの晚餐のテエブルを見守つてゐました。それから暫くしてかう答へました。

「あすこにある玉子焼は何と言つても、戀愛などよりも衛生的だからね。」

實際又河童の戀愛は我々人間の戀愛とは餘程趣を異にしてゐます。雌の河童はこれぞと云ふ雄の河童を見つけが早い、雄の河童を捉へるのに如何なる手段も顧みません。一番正直な雌の河童は遮二無二雄の河童を追ひかけます。現に僕は氣違ひのやうに雄の河童を追ひかけてゐる雌の河童を見かけました。いや、そればかりではありません。若い雌の河童は勿論、その河童の両親や兄弟まで一しよになつて追ひかけるのです。雄の河童こそ見じめです。何しろさんさん逃げまはつた揚句、運好くつかまらずにすんだとしても、二三箇月は床についてしまふのですから。僕は或時僕の家にとツクの詩集を讀んでゐました。するとそこへ駆けこんで来たのはあのラツプと云ふ學生です。ラツプは僕の家へ轉げこむと、床の上へ倒れたなり、息も切れ切れにかう言ふのです。

「大變だ！　とうとう僕は抱きつかれてしまつた！」

僕は咄嗟に詩集を投げ出し、戸口の錠をおろしてしまひました。しかし錠穴から覗いて見ると、硫黄の粉末を顔に塗つた、背の低い雌の河童が一匹、まだ戸口にうろつてゐるのです。ラツプはその日から何週間か僕の床の上に寝てゐました。のみならずいつかラツプの嘴はすつかり腐つて落ちてしまひました。

尤も又時には雌の河童を一生懸命に追ひかける雄の河童もないではありません。しかしそれほほんたうの所は追ひかけずにはゐられないやうに雌の河童が仕向けるのです。僕はやはり氣違ひのやうに雌の河童を追ひかけてゐる雄の河童も見かけました。雌の河童は逃げて行くうちにも、時々わざと立ち止まつて見たり、四つん這ひになつたりして見せるのです。おまけに丁度好い時分になると、さもがつかりしたやうに樂ぞつかませてしまふのです。僕の見かけた雄の河童は雌の河童を抱いたなり、暫くそこに轉がつてゐました。が、やつと起き上つたのを見ると、失望と云ふが、後悔と

云ふか、兎に角何とも形容出来ない、氣の毒な顔をしてゐました。しかしそれはまだ好いのです。これも僕の見かけた中に小さい雄の河童が一匹、雌の河童を追ひかけてゐました。雌の河童は例の通り、誘惑的遁走をしてゐるのです。するとそこへ向うの街から大きい雄の河童が一匹、鼻息を鳴らせて歩いて來ました。雌の河童は何かの拍子にふとこの雄の河童を見ると「大變です！ 助けて下さい！ あの河童はわたしを殺さうとするのです！」と金切り聲を出して叫びました。勿論大きい雄の河童は忽ち小さい河童をつかまへ、往來のまん中へねぢ伏せました。小さい河童は水掻きのある手に二三度空を掴んだなり、とうとう死んでしまひました。けれどももうその時には雌の河童はにやにやしなから、大きい河童の頸つ玉へしつかりしがみついてしまつてゐたのです。

僕の知つてゐた雄の河童は誰も皆言ひ合はせたやうに雌の河童に追ひかけられませんでした。勿論妻子を持つてゐるバツグでもやはり追ひかけられたのです。のみならず二三

度はつかまつたのです。唯マツグと云ふ哲學者だけは（これはあのトツクと云ふ詩人の隣にゐる河童です。）一度もつかまつたことはありません。これは一つにはマツグ位、醜い河童も少ない爲でせう。しかし又一つにはマツグだけは餘り往來へ顔を出さず、家にばかりゐる爲です。僕はこのマツグの家へも時々話しに出かけました。マツグはいつも薄暗い部屋に七色の色硝子のランタアンをともし、脚の高い机に向ひながら、厚い本ばかり讀んでゐるのです。僕は或時から云ふマツグと河童の戀愛を論じ合ひました。

「なぜ政府は雌の河童が雄の河童を追ひかけるのをもつと嚴重に取り締らないのです？」

「それは一つには官吏の中に雌の河童の少ない爲です。雌の河童は雄の河童よりも一層嫉妬心は強いものですからね。雌の河童の官吏さへ殖えれば、きつと今よりも雄の河童は追ひかけられずに暮せるでせう。しかしその効力も知れたものではね。なぜ



と言つて御覽なさい。官吏同志でも雌の河童は雄の河童を追ひかけますからね。」

「ちやあなたのやうに暮してゐるのは一番幸福な訣ですね。」  
するとマツグは椅子を離れ、僕の両手を握つたまま、ため息と一しよにかう言ひま  
した。

「あなたは我々河童ではありませんから、おわかりにならないのも尤もです。しかし  
わたしもどうかすると、あの恐ろしい雌の河童に追ひかけられたい氣も起るので  
よ。」

僕は又詩人のトックと度たび音楽會へも出かけました。が、未だに忘れられないの  
は三度目に聴きに行つた音楽會のことです。尤も會場の容子などは餘り日本と變つ  
てゐません。やはりだんだんせり上つた席に雌雄の河童が三四百匹、いづれもプロダ

ラムを手にしながら、一心に耳を澄ませてゐるのです。僕はこの三度目の音楽會の時  
にはトックやトックの雌の河童の外にも哲學者のマツグと一しよになり、一番前の席  
に坐つてゐました。するとセロの獨奏が終つた後、妙に目の細い河童が一匹、無造作  
に譜本を抱へたまま、壇の上へ上つて來ました。この河童はプログラムの教へる通  
り、名高いクラバツクといふ作曲家です。プログラムの教へる通り、——いや、プロ  
グラムを見るまでもありません。クラバツクはトックが屬してゐる超人倶樂部の會員  
ですから、僕も亦顔だけは知つてゐるのです。

「Lied—Craback」(この國のプログラムの大抵は獨逸語を並べてゐました。)

クラバツクは盛んな拍手の中にちよつと我々へ一禮した後、靜にピアノの前へ歩み  
寄りました。それからやはり無造作に自作のリードを弾きはじめました。クラバツク  
はトックの言葉によれば、この國の生んだ音楽家中、前後に比類のない天才ださうで  
す。僕はクラバツクの音楽は勿論、その又餘技の抒情詩にも興味を持つてゐましたか

ら、大きい弓なりのピアノの音に熱心に耳を傾けておりました。トックやマツグも恍惚としてゐたことは或は僕よりも勝つてゐたでせう。が、あの美しい（少くとも河童たちの話によれば）雌の河童だけはしつかりプログラムを握つたなり、時々さも苛ら立たしさに長い舌をべろべろ出してゐました。これはマツグの話によれば、何でも彼は十年前にクラバツクを掴まへそなたのものですから、未だにこの音楽家を目の敵にしてゐるのだとか云ふことです。

クラバツクは全身に情熱をこめ、戦ふやうにピアノを弾きつづけました。すると突然會場の中に神鳴りのやうに響渡つたのは「演奏禁止」と云ふ聲です。僕はこの聲にびつくりし、思はず後をふり返りました。聲の主は紛れもない、一番後の席にゐる身の丈抜群の巡查です。巡查は僕がふり向いた時、悠然と腰をおろしたまま、もう一度前よりもおほ聲に「演奏禁止」と怒鳴りました。それから、——  
それから先は大混乱です。「警官横暴！」「クラバツク、弾け！」「弾け！」「莫迦！」

「畜生！」「ひつこめ！」「負けるな！」——かういふ聲の湧き上つた中に椅子は倒れる、プログラムは飛ぶ、おまけに誰が投げるのか、サイダアの空欄や石ころや囃せりかけの胡瓜さへ降つて來るのです。僕は呆つ氣にとられましたから、トックにその理由を尋ねようと思いました。が、トックも興奮したと見え、椅子の上につ立ちながら、「クラバツク、弾け！」「弾け！」と喚きつづけてゐます。のみならずトックの雌の河童もいつの間にか敬意を忘れたのか、「警官横暴」と叫んでゐることは少しもトックに變りません。僕はやむを得ずマツグに向かひ、「どうしたのです？」と尋ねて見ました。「これですか！ これはこの國ではよくあることですよ。元來畫だの文藝だのは……」マツグは何か飛んで來る度にちよつと頭を縮めながら、不相變靜に説明しました。「元來畫だの文藝だのは誰の目にも何を表はしてゐるかは兎に角ちやんとわかる筈です。この國では決して發賣禁止や展覽禁止は行はれません。その代りにあるのが演奏禁止です。何しろ音楽と云ふものだけはどんなに風俗を壊亂する曲でも、耳のな

河童にはわかりませんからね。」

「しかしあの巡査は耳があるのですか？」

「さあ、それは疑問ですね。多分今の旋律を聞いてゐるうちに細君と一しよに寝てゐる時の心臓の鼓動でも思ひ出したのでせう。」

かう云ふ間にも大騒ぎは愈盛んになるばかりです。クラブはピアノに向つたまま、傲然と我々をふり返つてゐました。が、いくら傲然としてゐても、いろいろのもの飛んで来るのはよけない訣に行きません。従つてつまり二三秒置きに折角の態度も變つた訣です。しかし兎に角大體としては大音楽家の威厳を保ちながら、細い目を凄まじく赫やかせてゐました。僕は——僕も勿論危険を避ける爲にトツクを小楯にとつてゐたものです。が、やはり好奇心に驅られ、熱心にマツグと話しつづけました。

「そんな検閲は亂暴ぢやありませんか？」

「何、どの國の検閲よりも却つて進歩してゐる位ですよ。たとへば××を御覽なさい。現について一月ばかり前にも、……」

丁度かう言ひかけた途端です。マツグは生憎臆天に空爆が落ちたものですから、gauck（これは唯間投詞です）と一聲叫んだぎり、とうとう氣を失つてしまいました。

八

僕は硝子會社の社長のゲエルに不思議にも好意を持つてゐました。ゲエルは資本家中の資本家です。恐らくはこの國の河童の中でも、ゲエルほど大きい腹をした河童は一匹もゐなかつたのに違ひありません。しか、荔枝に似た細君や胡瓜に似た子供を左右にしながら、安樂椅子に坐つてゐる所は殆ど幸福そのものです。僕は時々裁判官のベツブや醫者のチャツクにつれられてゲエル家の晩餐へ出かけました。又ゲエルの紹介状を持つてゲエルやゲエルの友人たちが多少の關係を持つてゐるいろいろの工場も

見て歩きました。そのいろいろの工場の中でも殊に僕に面白かつたのは書籍製造会社の工場です。僕は年の若い河童の技師とこの工場の中へはひり、水力電氣を動力にした、大きい機械を眺めた時、今更のやうに河童の國の機械工業の進歩に驚嘆しました。何でもそこでは一年間に七百萬部の本を製造するさうです。が、僕を驚かしたのとは本の部数ではありません。それだけの本を製造するのに少しも手数のかからないこととです。何しろこの國では本を造るのに唯機械の漏斗形の口へ紙とインクと灰色をした粉末とを入れるだけなのですから。それ等の原料は機械の中へはひると、殆ど五分とたたないうちに菊版、四六版、菊半截版などの無数の本になつて出て來るのです。僕は瀑のやうに流れ落ちるいろいろの本を眺めながら、反り身になつた河童の技師にその灰色の粉末は何と云ふものかと尋ねて見ました。すると技師は黒光りに光つた機械の前に佇んだまま、つまらなさうにかう返事をしました。

「これですか？　これは驢馬の脳髓ですよ。ええ、一長乾燥させてから、ざつと粉末

にしただけのものです。時價は一噸二三錢ですがね。」

勿論かう云ふ工業上の奇蹟は書籍製造会社にばかり起つてゐる訣ではありません。繪畫製造會社にも、音楽製造會社にも、同じやうに起つてゐるのです。實際又ゲエルの記によれば、この國では平均一箇月に七八百種の機械が新案され、何でもすんずん人手を待たずに大量生産が行はれるさうです。従つて又職工の解雇されるのも四五萬匹を下らないさうです。その猶まだこの國では毎朝新聞を讀んでゐても、一度も罷業と云ふ字に出會ひません。僕はこれを妙に思ひましたから、或時又ベツアやチャックとゲエル家の晩餐に招かれた機會にこのことをなぜかと尋ねて見ました。

「それはみんな食つてしまふのですよ。」

食後の葉卷を啣へたゲエルは如何にも無造作にかう言ひました。しかし「食つてしまふ」と云ふのは何のことだかわかりません。すると鼻目金をかけたチャックは僕の不審を察したと見え、横あひから説明を加へてくれました。

「その職工をみんな殺してしまつて、肉を食料に使ふのです。ここにある新聞を御覽なさい。今月は丁度六萬四千七百六十九匹の職工が解雇されましたから、それだけ肉の價段も下つた訣ですよ。」

「職工は黙つて殺されるのですか？」

「それは馴いでも仕かたはありません。職工屠殺法があるのですから。」

これは山桃の針植を後に苦い顔をしてゐたベツプの言葉です。僕は勿論不快を感じました。しかし主人公のゲエルは勿論、ベツプやチャックもそんなことは當然と思つてゐるらしいのです。現にチャックは笑ひながら、囁るやうに僕に話しかけました。

「つまり餓死したり自殺したりする手数を國家的に省略してやるのですね。ちよつと有毒瓦斯を嗅がせるだけですから、大した苦痛はありませんよ。」

「けれどもその肉を食ふと云ふのは、……」

「常談を言つてはいけません。あのマツグに聞かせたら、さぞ大笑ひに笑ふでせう。

あなたの國でも第四階級の娘たちは賣笑婦になつてゐるではありませんか？ 職工の肉を食ふことなどに憤慨したりするのは感傷主義ですよ。」

かう云ふ問答を聞いてゐたゲエルは手近いテエブルの上にあつたサンドウィッチの皿を勧めながら、恬然と僕にかう言ひました。

「どうですか？ 一つとりませんか？ これも職工の肉ですがね。」

僕は勿論辟易しました。いや、そればかりではありません。ベツプやチャックの笑ひ聲を後にゲエル家の客間を飛び出しました。それは丁度家々の空に星明りも見えない荒れ模様の夜です。僕はその闇の中を僕の住居へ歸りながら、のべつ幕なしに嘔吐を吐きました夜目にも白じらと流れる嘔吐を。

しかし硝子會社の社長のゲエルは人懐こい河童だつたのに違ひません。僕は度たびゲエルと一しよにゲエルの屬してゐる俱樂部へ行き、愉快に一晚を暮らしました。それは一つにはその俱樂部はトツクの屬してゐる超人俱樂部よりも遙かに居心の善かつた爲です。のみならず又ゲエルの話は哲學者のマツグの話のやうに深みをもつてゐなかつたにせよ、僕には全然新しい世界を、——廣い世界を覗かせました。ゲエルは、いつも純金の匙に珈琲の茶碗をかきまはしながら、快活にいろいろの話をしたものです。

何でも或霧の深い晩、僕は冬薔薇を盛つた花瓶を中にゲエルの話を聞いてゐました。それは確か部屋全體は勿論、椅子やテーブルも白い上に細い金の縁をとつたセセツション風の部屋だつたやうに覺えてゐます。ゲエルはふだんよりも得意さうに顔中に微笑を漲らせたまま、丁度その頃天下を取つてゐたのミニク黨内閣のことなどを話しました。クオラツクスと云ふ言葉は唯意味のない間投詞ですから、「おや」とでも譯

す外はありません。が、兎に角何よりも先に「河童全體の利益」と云ふことを標榜してゐた政黨だつたのです。

「クオラツクス黨を支配してゐるものは名高い政治家のロツベです。『正直は最良の外交である』とはビスマルクの言つた言葉でせう。しかしロツベは正直を内治の上にも及ぼしてゐるのです。……」

「けれどもロツベの演説は……」

「まあ、わたしの言ふことをお聞きなさい。あの演説は勿論悉く誠です。が、誠と云ふことは誰でも知つてゐますから、畢竟正直と變らないでせう、それを一概に誰と云ふのはあなたがただけの偏見ですよ、我々河童はあなたがたのやうに、……しかしそれはどうでもよろしい。わたしの話したいのはロツベのことです。ロツベはクオラツクス黨を支配してゐる、その又ロツベを支配してゐるものは Pou-Fou 新聞の（この『プウ・フウ』と云ふ言葉もやはり意味のない間投詞です。若し強ひて譯すれば、

「ああ」とでも云ふ外はありません。社長のクイクイです。が、クイクイも彼自身の主人と云ふ訣には行きません。クイクイを支配してゐるものはあなたの前にゐるゲエルです。」

「けれども——これは失禮かも知れませんが、ブウ・フウ新聞は労働者の味かたをする新聞でせう。その社長のクイクイもあなたの支配を受けてゐると云ふのは、……」

「ブウ・フウ新聞の記者たちは勿論労働者の味かたです。しかし記者たちを支配するものはクイクイの外はありますまい。しかもクイクイはこのゲエルの後援を受けずにはゐられないのです。」

ゲエルは不相變微笑しながら、純金の匙をおもちやにしてゐます。僕はかう云ふゲエルを見ると、ゲエル自身を憎むよりも、ブウ・フウ新聞の記者たちに同情の起るのを感じました。するとゲエルは僕の無言に忽ちこの同情を感じたと見え、大きい腹を

膨ませてかう言ふのです。

「何、ブウ・フウ新聞の記者たちも全部労働者の味かたではありませんよ。少くとも我々河童と云ふものは誰の味かたをするよりも先に我々自身の味かたをしますからね。……しかし更に厄介なことにはこのゲエル自身さへやはり他人の支配を受けてゐるのです。あなたはそれを誰だと思ひますか？ それはわたしの妻ですよ。美しいゲエル夫人ですよ。」

ゲエルはおほ聲に笑ひました。  
「それは寧ろ仕合せでせう。」

「兎に角わたしは満足してゐます。しかしこれもあなたの前だけに、——河童でないあなたの前だけに手放して吹聴出来るのです。」

「するとつまりクオラックス内閣はゲエル夫人が支配してゐるのですね。」  
「さあさうも言はれますかね。……しかし七年前の戦争などは確かに或鱈の河童の爲

に始まつたものに違ひありません。」

「戦争？ この國にも戦争はあつたのですか？」

「ありましたとも。將來もいつあるかわかりません。何しろ隣國のある限りは、……」  
 僕は實際この時始めて河童の國も國家的に孤立してゐないことを知りました。ゲエルの説明する所によれば、河童はいつも獺を假設敵にしてゐると云ふことです。しかも獺は河童に負けない軍備を具へてゐると云ふことです。僕はこの獺を相手に河童の戦争した話に少からず興味を感じました。(何しろ河童の強敵に獺のゐるなど云ふことは「水虎考略」の著者は勿論、「山島民譚集」の著者柳田國男さんさへ知らずにもたらしい新事實ですから。)

「あの戦争の起る前には勿論兩國とも油断せずにつつと相手を窺つてゐました。と云ふのはどちらも同じやうに相手を恐怖してゐたからです。そこへこの國にわた獺が一匹、或河童の夫婦を訪問しました。その又雌の河童と云ふのは亭主を殺すつもりで

わたのです。何しろ亭主は道樂者でしたからね。おまけに生命保険のついてゐたことも多少の誘惑になつたかも知れません。」

「あなたはその夫婦を御存じですか？」

「ええ。——いや、雌の河童だけは知つてゐます。わたしの妻などはこの河童を悪人のやうに言つてゐますがね。しかしわたしに言はせれば、悪人よりも寧ろ雌の河童に振まふことを恐れてゐる被害妄想の多い狂人です。……そこでその雌の河童は亭主のユコアの茶碗の中へ青化加里を入れて置いたのです。それを又どう間違へたか、客の獺に飲ませてしまつたのです。獺は勿論死んでしまひました。それから……」

「それから戦争になつたのですか？」

「ええ。生憎その獺は勳章を持つてゐたものですからね。」

「戦争はどちらの勝になつたのですか？」

「勿論この國の勝になつたのです。三十六萬九千五百匹の河童たちはその爲に健氣に



46 も戦死しました。しかし敵國に比べれば、その位の損害は何ともありません。この國にある毛皮と云ふ毛皮は大抵、獺の毛皮です。わたしもあの戦争の時には硝子を製造する外にも石炭殻を戦地へ送りました。」

「石炭殻を何にするのですか？」

「勿論、食糧にするのです。我々は、河童は腹さへ減れば、何でも食ふのにきまつてゐますからね。」

「それは——どうか怒らずに下さい。それは戦地にゐる河童たちには……我々の國では醜聞ですがね。」

「この國でも醜聞には違ひありません。しかしわたし自身かう言つてゐれば、誰も醜聞にはしないものです。哲學者のマツグも言つてゐるでせう。「汝の悪は汝自ら言へ。悪はおのづから消滅すべし。」……しかもわたしは利益の外にも愛國心に燃え立つてゐたのですからね。」

47 丁度そこへはひつて來たのはこの俱樂部の給仕です。給仕はゲエルにお時宜をした後、朗讀でもするやうにかう言ひました。

「お宅のお隣に火事がございます。」

「火——火事！」

ゲエルは驚いて立ち上りました。僕も立ち上つたのは勿論です。が、給仕は落ちつき拂つて次の言葉をつけ加へました。

「しかしもう消し止めました。」

ゲエルは給仕を見送りながら、いき笑ひに近い表情をしました。僕はかう云ふ顔を見るとき、いつかこの硝子會社の社長を憎んでゐたことに氣づきました。が、ゲエルはもう今では大資本家でも何でも無い唯の河童になつて立つてゐるのです。僕は花瓶の中の冬薔薇の花を抜き、ゲエルの手へ渡しました。

「しかし火事は消えた」と云つても、奥さんはさぞお驚きでせう。さあ、これを持って

「お歸りなさい。」

「難有う。」

ゲエルは僕の手を握りました。それから急ににやりと笑ひ、小聲にかう僕に話しかけました。

「隣はわたしの家作ですからね。火災保険の金だけはとれるのですよ。」

僕はこの時のゲエルの微笑を——輕蔑することも出来なければ、憎惡することも出来なないゲエルの微笑を未だにありありと覚えてゐます。

十

「どうしたね？ けふは又妙にふさいでゐるぢやないか？」

その火事のあつた翌日です。僕は巻煙草を啣へながら、僕の客間の椅子に腰をおろした學生のラツプにかり言ひました。實際又ラツプは右の脚の上へ左の脚をのせたま

ま、腐つた嘴も見えないほど、ぼんやり床の上ばかり見てゐたのです。

「ラツプ君、どうしたねと言へば。」

「いや、何、つまらないことなのですよ。——」

ラツプはやつと頭を擧げ、悲しい鼻聲を出しました。

「僕はけふ窓の外を見ながら、『おや蟲取り堇が咲いた』と何氣なしに呟いたのです。すると僕の妹は急に顔色を變へたと思ふと、『どうせわたしは蟲取り堇よ』と當り散らすぢやありませんか？ おまけに又僕のおふくろも大の妹最良ですから、やはり僕に食つてかかるのです。」

「蟲取り堇が咲いたと云ふことはどうして妹さんには不快なのだね？」

「さあ、多分雄の河童を掴まへると云ふ意味にでもとつたのでせう。そこへおふくろと仲悪い叔母も喧嘩の仲間入りをしたのですから、愈大騒動になつてしまひました。しかも年中酔つ拂つてゐるおやぢはこの喧嘩を聞きつけると、誰彼の差別なしに殴り

出したのです。それだけでも始末のつかない所へ僕の弟はその間におふくろの財布を盗むが早い、キネマか何かを見に行つてしまひました。僕は……ほんたうに僕はもう、……」

河

ラツプは両手に顔を埋め、何も言はずに泣いてしまひました。僕の同情したのは勿論です。同時に又家族制度に對する詩人のトツクの輕蔑を思ひ出したのも勿論です。

僕はラツプの肩を叩き、一生懸命に慰めました。

「そんなことはどこでもあり勝ちだよ。まあ勇氣を出し給へ。」

「しかし……しかし、嘴でも腐つてゐなければ、……」

「それはあきらめる外はないさ。さあ、トツク君の家へでも行かう。」

「トツクさんは僕を輕蔑してゐます。僕はトツクさんのやうに大膽に家族を捨てることが出来ませんから。」

「ちやクラバツク君の家へ行かう。」

河

僕はあの音樂會以來、クラバツクにも友だちになつてゐましたから、兎に角この大音樂家の家へラツプをつれ出すことにしました。クラバツクはトツクに比べれば、遙かに贅澤に暮らしてゐます。と云ふのは資本家のゲェルのやうに暮らしてゐると云ふ意味ではありません。唯いろいろの骨董を、——タナグラの人形やベルシアの陶器を部屋一ぱいに並べた中にトルコ風の長椅子を据ゑ、クラバツク自身の肖像畫の下に、いづも子供たちと遊んでゐるのです。が、けふはどうしたのか兩腕を胸へ組んだまま、苦い顔をして坐つてゐました。のみならずその又足もとには紙屑が一面に散らばつてゐました。ラツプも詩人トツクと一しよに度たびクラバツクには會つてゐる筈です。しかしこの容子に恐れたと見え、けふは丁寧に時宜をしたなり、黙つて部屋の隅に腰をおろし泣きました。

「どうしたね。クラバツク君。」

僕は殆ど挨拶の代りにかう大音樂家へ問かけました。

「どうするものか？ 批評家の阿呆め！ 僕の抒情詩はトックの抒情詩と比べものにならないと言やがるんだ。」

「しかし君は音楽家だし、……」

「それだけならば我慢も出来る、僕はロックに比べれば、音楽家の名に値しないと言やがるぢやないか？」

ロックと云ふのはクラブバックと度たび比べられる音楽家です。が、生憎超人倶楽部の會員になつてゐない關係上、僕は一度も話したことはありません。尤も嘴の反り上つた、一癖あるらしい顔だけは度たび寫真でも見かけてゐました。

「ロックも天才には違ひない。しかしロックの音楽は君の音楽に溢れてゐる近代的情熱を持つてゐない。」

「君はほんたうにさう思ふか？」

「さう思ふとも。」

するとクラブバックは立ち上るが早いか、タナグラの人形をひつ掴み、いきなり床の上に叩きつけました。ラップは餘程驚いたと見え、何か聲を擧げて逃げようとした。が、クラブバックはラップや僕にはちよつと「驚くな」と云ふ手真似をした上、今度は冷やかにかう言ふのです。

「それは君も亦俗人のやうに耳を持つてゐないからだ。僕はロックを恐れてゐる。……」

「君が？ 謙遜家を氣どるのはやめ給へ。」

「誰が謙遜家を氣どるものか？ 第一君たちに氣どつて見せる位ならば、批評家たちの前に氣どつて見せてゐる。僕は——クラブバックは天才だ。その點ではロックを恐れてゐない。」

「では何を恐れてゐるのだ？」

「何か正體の知れないものを、——言はばロックを支配してゐる星を。」

「どうも僕には附に落ちないがね。」

「ではかう言へばわかるだらう。ロックは僕の影響を受けない。が、僕はいつの間にかロックの影響を受けてしまふのだ。」

「それは君の感受性の……。」

「まあ、聞き給へ。感受性などの問題ではない。ロックはいつも安んじてあいつだけ出来る仕事をしてゐる。しかし僕は苛ら苛らするのだ。それはロックの目から見れば、或は一步の差かも知れない。けれども僕には十哩も違ふのだ。」

「しかし先生の英雄曲は……。」

クラバックは細い目を一層細め、忌々しさにラップを睨みつけました。

「黙り給へ。君などに何がわかる？ 僕はロックを知つてゐるのだ。ロックに平身低頭する犬どもよりもロックを知つてゐるのだ。」

「まあ少し静かにし給へ。」

「若し静かにしてゐられるならば、……僕はいつもかう思つてゐる。——僕等の知らない何ものかは僕を、——クラバックを嘲る爲にロックを僕の前に立たせたのだ。哲學者のマッグはかう云ふことを何も彼も承知してゐる。いつもあの色硝子のランタマンの下に古ぼけた本ばかり讀んでゐる癖に。」

「どうして？」

「この近頃マッグの書いた『阿呆の言葉』と云ふ本を見給へ。——」

クラバックは僕に一冊の本を渡す——と云ふよりも投げつけました。それから又腕を組んだまま、突けんどんにかう言ひ放ちました。

「ちやけふは失敬しよう。」

僕は悄気返つたラップと一しよにもう一度往來へ出ることにしました。人通りの多い往來は不相變毛生櫛の並み木のかげにいろいろの店を並べてゐます。僕等は何と云ふこともなしに黙つて歩いて行きました。するとそこへ通りかかつたのは髪の長い詩

人のトックです。トックは僕等の顔を見ると、腹の袋から手巾を出し、何度も額を拭ひました。

「やあ、暫らく會はなかつたね。僕はけふは久しぶりにクラバックを尋ねようと思ふのだが、……」

僕はこの藝術家たちを喧嘩させては悪いと思ひ、クラバックの如何にも不機嫌だつたことを婉曲にトックに話しました。

「さうか。ちややめにしよう。何しろクラバックは神経衰弱だからね。……僕もこの二三週間は眠られないのに弱つてゐるのだ。」

「どうだね、僕等と一しよに散歩をしては？」

「いや、けふはやめにしよう。おや！」

トックはかう叫ぶが早い、しつかり僕の腕を掴みました。しかもいつか體中に冷や汗を流してゐるのです。

「どうしたのだ？」

「どうしたのです？」

「何あの自動車の窓の中から緑いろの猿が一匹首を出したやうに見えたのだよ。」

僕は多少心配になり、兎に角あの醫者のチャックに診察して貰ふやうに勧めました。しかしトックは何と言つても、承知する氣色さへ見せません。のみならず何か疑はしさうに僕等の顔を見比べながら、こんなことさへ言ひ出すのです。

「僕は決して無政府主義者ではないよ。それだけはきつと忘れずにおてくれ給へ。——ではさやうなら。チャックなどは眞平御免だ。」

僕等はぼんやり佇んだまま、トックの後ろ姿を見送つてゐました。僕等は——いや、「僕等」ではありません。學生のラップはいつの間にか往來のまん中に脚をひろげ、しつかりない自動車や人通りを股目に覗いてゐるのです。僕はこの河童も發狂したかと思ひ、驚いてラップを引き起しました。

「常談ぢやない。何をしてゐる？」  
しかしラツプは目をこすりながら、意外にも落ち着いて返事をしました。  
「いえ、餘り憂鬱ですから、逆まに世の中を眺めて見たのです。けれどもやはり同じことですね。」

十一

これは哲學者のマツグの書いた「阿呆の言葉」の中の何章かです。――

阿呆はいつも彼以外のものを阿呆であると信じてゐる。

我々の自然を愛するのは自然は我々を憎んだり嫉妬したりしない爲もないことはな

最も賢い生活は一時代の習慣を輕蔑しながら、しかもその又習慣を少しも破らないやうに暮らすことである。

我々の最も誇りたいものは我々の持つてゐないものだけである。

何びとも偶像を破壊することに異存を持つてゐるものはない。同時に又何びとも偶像になることに異存を持つてゐるものはない。しかし偶像の臺座の上に安んじて坐つてゐられるものは最も神々に恵まれたもの、――阿呆か、悪人か、英雄かである。(クラバツクはこの章の上へ爪の痕をつけてゐました。)

我々の生活に必要な思想は三千年前に盡きたかも知れない。我々は唯古い薪に新ら

しい炎を加へるだけであらう。

我々の特色は我々自身の意識を超越するのを常としてゐる。

幸福は苦痛を伴ひ、平和は倦怠を作ふとすれば、——？

自己を辯護することは他人を辯護することよりも困難である。疑ふものは辯護士を見よ。

矜誇、愛慾、疑惑——あらゆる罪は三千年來、この三者から發してゐる。同時に又恐らくはあらゆる徳も。

物質的欲望を減ずることは必しも平和を齎さない。我々は平和を得る爲には精神的欲望も減じなければならぬ。(クラバツクはこの章の上にも爪の痕を残してゐました。)

我々は人間よりも不幸である。人間は河童ほど進化してゐない。(僕はこの章を讀んだ時思はず笑つてしまひました。)

成すことは成し得ることであり、成し得ることは成すことである。畢竟我々の生活はかう云ふ循環論法を脱することは出来ない。——即ち不合理に終始してゐる。

ポオドレエルは白痴になつた後、彼の人生觀をたつた一語に、——女陰の一語に表白した。しかし彼自身を語るものは必しもかう言つたことではない。寧ろ彼の天才



に、——彼の生活を維持するに足る詩的天才に信頼した爲に胃袋の一語を忘れたことである。(この章にもやはりクラバツクの爪の痕は残つておました。)

若し理性に終始するとすれば、我々は當然我々自身の存在を否定しなければならぬ。理性を神にしたヴォルテルの幸福に一生を了つたのは即ち人間の河童よりも進化したてゐないことを示すものである。

## 十二

或割り合に寒い午後です。僕は「阿呆の言葉」も読み飽きましたから、哲學者のマツダを氣ねに出かけました。すると或寂しい町の角に蚊のやうに瘦せた河童が一匹、ほんやり壁によりかかつておました。しかもそれは紛れもない、いつか僕の萬年筆を盗んで行つた河童なのです。僕はしめたと思ひましたから、丁度そこへ通りかかつ

た、逞しい巡査を呼びとめました。

「ちよつとあの河童を取り調べて下さい。あの河童は丁度一月ばかり前にわたしの萬年筆を盗んだのですから。」

巡査は右手の棒をあげ、この國の巡査は劍の代りに水松の棒を持つてゐるのです。

「おい、君」とその河童へ聲をかけました。僕は或はその河童は逃げ出しはしないかと思つておました。が、存外落ち着き拂つて巡査の前へ歩み寄りました。のみならず腕を組んだまま、如何にも傲然と僕の顔や巡査の顔をじろじろ見てゐるのです。しかし巡査は怒りもせず、腹の袋から手帳を出して早速尋問にとりかかりました。

「お前の名は？」

「グルツク。」

「職業は？」

「つい二三日前までは郵便配達夫をしてゐました。」

64 「よろしい。そこでこの人の申し立てによれば、君はこの人の万年筆を盗んで行つたと云ふことだがね。」

「ええ、一月ばかり前に盗みました。」

「何の爲に？」

「子供の玩具にしようと思つたのです。」

「その子供は？」

「巡査は始めて相手の河童へ鋭い目を注ぎました。」

「一週間前に死んでしまひました。」

「死亡證明書を持つてゐるかね？」

「瘦せた河童は腹の袋から一枚の紙をとり出しました。巡査はその紙へ目を通すと、

急ににやにや笑ひながら、相手の肩を叩きました。」

「よろしい。どうも御苦勞だつたね。」

僕は呆氣にとられたまま、巡査の顔を眺めてゐました。しかもそのうちに瘦せた河童は何かぶつぶつ吹きながら、僕等を後ろにして行つてしまふのです。僕はやつと氣をとり直し、かう巡査に尋ねて見ました。

「どうしてあの河童を掴まへないので？」

「あの河童は無罪ですよ。」

「しかし僕の万年筆を盗んだのは……」

「子供の玩具にする爲だつたのでせう。けれどもその子供は死んでゐるのです。若し何か御不審だつたら、刑法千二百八十五條をお調べなさい。」

65 巡査はかう言ひすてたなり、さつさとどこかへ行つてしまひました。僕は仕かたがありませんから、「刑法千二百八十五條」を口の中に繰り返し、マツグの家へ急いで行きました。哲學者のマツグは客好きです。現にけふも薄暗い部屋には裁判官のベツブや醫者のチャツクや硝子會社の社長のゲエルなどが集り、七色の色硝子のランタア

ンの下に煙草の煙を立ち昇らせておきました。そこに裁判官のベツプが来てゐたのは何よりも僕には好都合です。僕は椅子にかけが早いから、刑法第一千二百八十五條を檢べる代りに早速ベツプへ問ひかけました。

「ベツプ君、甚だ失禮ですが、この國では罪人を罰しないのですか？」

ベツプは金口の煙草の煙をまづ悠々と吹き上げてから、如何にもつまらなさうに返事をしました。

「罰しますとも。死刑さへ行はれる位ですからね。」

「しかし僕は一月ばかり前に、……」

僕は委細を話した後、例の刑法千二百八十五條のことを尋ねて見ました。

「ふむ、それはかう云ふのです。『如何なる犯罪を行ひたりと雖も、該犯罪を行はしめたる事情の消失したる後は該犯罪者を處罰することを得ず』つまりあなたの場合で言へば、その河童は嘗ては親だつたのですが、今はもう親ではありませんから、

犯罪も自然と消滅するのです。」

「それはどうも不合理ですね。」

「常談を言つてはいけません。親だつた河童も親である河童も同一に見るのこそ不合理です。さうさう、日本の法律では同一に見る事になつてゐるのですね。それはどうも我々には滑稽です。ふふふふふふふふ。」

ベツプは巻煙草を抛り出しながら、氣のない薄笑ひを洩らしてゐました。そこへ口を出したのは法律には縁の遠いチャックです。チャックはちよつと鼻目金を直し、かう僕に質問しました。

「日本にも死刑はありますか？」

「ありますとも、日本では絞罪です。」

僕は冷然と構へこんだベツプに多少反感を感じてゐましたから、この機会に皮肉を浴せてやりました。

「この國の死刑は日本よりも文明的に出来てゐるでせうね？」

「それは勿論文明的です。」

ベツプはやはり落ち着いてゐました。

「この國では絞罪などは用ひません。稀には電氣を用ひることもあります。しかし大抵は電氣も用ひません。唯その犯罪の名を言つて聞かせるだけです。」

「それだけで河童は死ぬのですか？」

「死にますとも。我々河童の神経作用はあなたがたのよりも微妙ですからね。」

「それは死刑ばかりではありません。殺人にもその手を使ふのがあります——」

社長のゲエルは色硝子の光に顔中紫に染りながら、人懐っこい笑顔をして見せました。

「わたしはこの間も或社會主義者に『貴様は盗人だ』と言はれた爲に心臓麻痺を起しかかつたものです。」

「それは案外多いやうですね。わたしの知つてゐた或辯護士などはやはりその爲に死んでしまつたのですからね。」

彼は、かう口を入れた河童、——哲學者のマグをふりかへりました。マグはやはりいつものやうに皮肉な微笑を浮かべたまま、誰の顔も見ずにしゃべつてゐるのです。

「その河童は誰かに蛙だと言はれ、——勿論あなたも御承知でせう、この國で蛙だと言はれるのは人非人と云ふ意味になること位は。——己は蛙かな？ 蛙ではないかな？ と毎日考へてゐるうちにとうとう死んでしまつたものです。」

「それはつまり自殺ですね。」

「尤もその河童を蛙だと言つたやつは殺すつもりで云つたのですがね。あなたがたの目から見れば、やはりそれも自殺と云ふ……」

丁度マグがかう言つた時です。突然その部屋の壁の向うに、——確かに詩人のトツクの家いへに鋭いピストルの音が一發、空氣を反ね返へすやうに響き渡りました。

僕等はトツクの家へ駆けつけました。トツクは右の手にピストルを握り、頭の皿から血を出したまま、高山植物の鉢植えの中に仰向けになつて倒れておりました。その又側には雌の河童が一匹、トツクの胸に顔を埋め、大聲を擧げて泣いておりました。僕は雌の河童を抱き起しながら、「一體僕はぬらぬらする河童の皮膚に手を觸れることを餘り好んではゐないのですが。」と尋ねました。

「どうしたのだから、わかりません。唯何か書いてゐたと思ふと、いきなりピストルで頭を打つたのです。ああ、わたしはどうしませう？ *qu-er-ri-r-r, qu-er-ri-r-r*、(これは河童の泣き聲です。)

「何しろトツク君は我儘だつたからね。」

硝子會社の社長のゲエルは悲しさに頭を振りながら、裁判官のベツブにかう言ひ

ました。しかしベツブは何も言はずに金口の巻煙草に火をつけておりました。すると今まで跪いて、トツクの創口などを調べてゐたチャックは如何にも醫者らしい態度をしました。僕等五人に宣言しました。(實は一人と四匹とです。)

「もう駄目です。トツク君は元來胃病でしたから、それだけでも憂鬱になり易かつたのです。」

「何か書いてゐたと云ふことですが。」

哲學者のマツグは辯解するやうにかう獨り語を洩らしながら、机の上の紙をとり上げました。僕等は皆頸をのぼし、(尤も僕だけは例外です。)幅の広いマツグの肩越しに一枚の紙を覗きこみました。

いざ、立ちて行かん。娑婆界を隔つる谷へ。

岩むらはここしく、やま水は清く、

藥草の花はほへる谷へ。」

マツグは僕等をふり返りながら、微笑と一しよにかう言ひました。  
 「これはゲエテの『ミニヨンの歌』の剽竊ですよ。するとトツク君の自殺したのは詩人としても被れてゐたのですね。」

そこへ偶然自動車を乗りつけたのはあの音楽家のクラバツクです。クラバツクはかう云ふ光景を見ると、暫く戸口に佇んでゐました。が、僕等の前へ歩み寄ると、怒鳴りつけるやうにマツグに話しかけました。

「それはトツクの遺言状ですか？」

「いや、最後に書いてゐた詩です。」

「詩？」

やはり少しも騒がないマツグは髪を逆立てたクラバツクにトツクの詩稿を渡しました。クラバツクはあたりには目もやらずに熱心にその詩稿を読み出しました。しかもマツグの言葉には殆ど返事さへしないのです。

「あなたはトツク君の死をどう思ひますか？」

「いざ、立ちて、……僕も亦いつ死ぬかわかりません。……娑婆界を隔つる谷へ。……」

「しかしあなたはトツク君とはやはり親友の一人だつたのでせう？」

「親友？ トツクはいつも孤獨だつたのです。……娑婆界を隔つる谷へ、……唯トツクは不幸にも、……岩むらはここしく……」

「不幸にも？」

「やま水は清く、……あなたがたは幸福です。……岩むらはここしく。……」

僕は未だに泣き聲を絶たない雌の河童に同情しましたから、そつと肩を抱へるやうにし、部屋の隅の長椅子へつれて行きました。そこには二歳か三歳かの河童が一匹、何も知らずに笑つてゐるのです。僕は雌の河童の代りに子供の河童をあやしてやりました。するといつか僕の目にも涙のたまるのを感じました。僕が河童の國に住んでゐ

るうちに涙と云ふものをこぼしたのも前にも後にもこの時だけです。

「しかしかう云ふ我儘な河童と一しよになつた家族は氣の毒ですね。」

「何しろあとのこととも考へないのですから。」

河 裁判官のベツプは不相變、新しい巻煙草に火をつけながら、資本家のゲエルに返事をしておきました。すると僕等を驚かせたのは音楽家のクラバツクのおほ聲です。クラバツクは詩稿を握つたまま、誰にもとなしに呼びかけました。

「しめた！ すばらしい葬送曲が出来るぞ。」

重 クラバツクは細い目を赫やかさせたまま、ちよつとマツグの手を握ると、いきなり戸口へ飛んで行きました。勿論もうこの時には隣近所の河童が大勢、トツクの家戸口に集まり、珍らしさうに家の中を覗いてゐるのです。しかしクラバツクはこの河童たちを遮二無二左右へ押しつけるが早い、ひらりと自動車へ飛び乗りました。同時に又自動車は爆音を立てて忽ちどこかへ行つてしまひました。

「こら、こら、さう覗いてはいかん。」

河 裁判官のベツプは巡査の代りに大勢の河童を押し出した後、トツクの家戸をしめてしまひました。部屋の中はそのせぬか急にひつそりなつたものです。僕等はかう云ふ静かさの中に――高山植物の花の香に交つたトツクの血の匂の中、後始末のことなどを相談しました。しかしあの哲學者のマツグだけはトツクの死骸を眺めたまま、ぼんやり何か考へてゐます。僕はマツグの肩を叩き、「何を考へてゐるのです？」と尋ねました。

重 「河童の生活と云ふものをね。」

「河童の生活がどうなるのです？」

河 「我々河童は何と云つても、河童の生活を完うする爲には、……」

重 マツグは多少羞しさうにかう小聲でつけ加へました。

「兎に角我々河童以外の何ものかの力を信することですな。」

僕に宗教と云ふものを思ひ出させたのはかう云ふマツグの言葉です。僕は勿論物質主義者ですから、眞面目に宗教を考へたことは一度もなかつたのに違ひありません。が、この時はドックの死に或感動を受けてゐた爲に一體河童の宗教は何であるかと考へ出したのです。僕は早速學生のラツプにこの問題を尋ねて見ました。

「それは基督教、佛教、モハメット教、拜火教なども行はれてゐます。まづ一番勢力のあるものは何と云つても近代教でせう。生活教とも言ひますがね。」（「生活教」と云ふ譯語は當つてゐないかも知れません。この原語は *Communaria* です。 *cha* は英吉利語の *ism* と云ふ意味に當るでせう。 *quemos* の原形 *quenal* の譯は單に「生きる」と云ふよりも「飯を食つたり、酒を飲んだり、交合を行つたり」する意味です。）「ぢやこの國にも教會だの寺院だのはある訣なのだね。」

「常談を言つてはいけません。近代教の大寺院などはこの國第一の大建築ですよ。どうです、ちよつと見物に行つては？」

或生温い曇天の午後、ラツプは得々と僕と一しよにこの大寺院へ出かけました。成程それはニコライ堂の十倍もある大建築です。のみならずあらゆる建築様式を一つに組み上げた大建築です。僕はこの大寺院の前に立ち、高い塔や圓屋根を眺めた時、何か無氣味にさへ感じました。實際それ等は天に向つて伸びた無数の觸手のやうに見えるたものです。僕等は玄關の前に佇んだまま、その又玄關に比べて見ても、どの位僕等は小さかつたのでせう！暫らくこの建築よりも寧ろ途方もない怪物に近い稀代の大寺院を見上げてゐました。

大寺院の内部も亦廣大です。そのコリント風の圓柱の立つた中には參詣人が何人も歩いてゐました。しかしそれ等は僕等のやうに非常に小さく見えたものです。そのうちに僕等は腰の曲つた一匹の河童に出合ひました。するとラツプはこの河童にちよつ



と頭を下げた上、丁寧にかう話しかけました。

「長老、御達者なのは何よりもです。」

相手の河童もお時宜をした後、やはり丁寧に返事をしました。

「これはラツプさんですか？ あなたも不相變、——（と言ひかけながら、ちよつと

言葉をつがなかつたのはラツプの嘴の腐つてゐるのにやつと氣がついた爲だつたで

せう。——ああ、兎に角御丈夫らしいやうですね。が、けふはどうして又……」

「けふはこの方のお伴をして來たのです。この方は多分御承知の通り、——」

それからラツプは滔々と僕のことを話しました。どうも又それはこの大寺院へラツ

プが滅多に來ないことの辯解にもなつてゐたらしいのです。

「就いてはどうかこの方の御案内を願ひたいと思ふのですが。」

長老は大様に微笑しながら、まづ僕に挨拶をし、靜かに正面の祭壇を指さしまし

た。

「御案内と申しても、何も御役に立つことは出來ません。我々信徒の禮拜するのは正  
面の祭壇にある『生命の樹』です。『生命の樹』には、御覽の通り、金と緑との果がな  
つてゐます。あの金の果を『善の果』と云ひ、あの緑の果を『惡の果』と云ひます。  
……」

僕はかう云ふ説明のうちにもう退屈を感じ出しました。それは折角の長老の言葉も  
古い比喩のやうに聞えたからです。僕は勿論熱心に聞いてゐる容子を装つてゐまし  
た。が、時々は大寺院の内部へそつと目をやるのを忘れずにゐました。

コリント風の柱、ゴシック風の穹窿、アラビアじみた市松模様の床、セセツジョン紛  
ひの祈禱机、——かう云ふものの作つてゐる調和は妙に野蠻な美を具へてゐました。

しかし僕の目を惹いたのは何よりも兩側の龕の中にある大理石の半身像です。僕は何  
かそれ等の像を見知つてゐるやうに思ひました。それも亦不思議ではありません。あ  
の腰の曲つた河童は「生命の樹」の説明を了ると、今度は僕やラツプと一しよに右側

の籠の前へ歩み寄り、その籠の中の半身像にかう云ふ説明を加へ出しました。

「これは我々の聖徒の一人、——あらゆるものに反逆した聖徒ストリメント・ペリイです。この聖徒はさんざん苦しんだ揚句、スウエデンボルクの哲學の爲に救はれたやうに言はれてゐます。が、實は救はれなかつたのです。この聖徒は唯我々のやうに生活教を信じてゐました。——と云ふよりも信じる外はなかつたのでせう。この聖徒の我に残した『傳説』と云ふ本を讀んで御覽なさい。この聖徒も自殺未遂者だつたことは聖徒自身告白してゐます。」

僕はちよつと憂鬱になり、次の籠へ目をやりました。次の籠にある半身像は口髭の太い獨逸人です。

「これはツアテストラの詩人ニイチエです。その聖徒は聖徒自身の造つた超人に救ひを求めました。が、やはり救はれずに氣違ひになつてしまつたのです。若し氣違ひにならなかつたとすれば、或は聖徒の數へはひることも出来なかつたかも知れませ

ん。……」

長老はちよつと黙つた後、第三の籠の前へ案内しました。

「三番目にあるのはトルストイです。この聖徒は誰よりも苦行をしました。それは元來貴族だつた爲に好奇心の多い公衆に苦しみを見せることを嫌つたからです。この聖徒は事實上信ぜられない基督を信じようと努力しました。いや、信じてゐるやうにさへ公言したこともあつたのです。しかしとうとう晩年には悲壯な諷つきだつたことに堪へられないやうになりました。この聖徒も時々書齋の梁に恐怖を感じたのは有名です。けれども聖徒の數にはひつてゐる位ですが、勿論自殺したのではありません。」

第四の籠の中の半身像は我々日本人の一人です。僕はこの日本人の顔を見た時、さすがに懐しさを感しました。

「これは國木田獨歩です。轢死する人足の心もちをはつきり知つてゐた詩人です。しかしそれ以上の説明はあなたには不必要に違ひありません。では五番目の籠の中を御

覽下さい。——」

「これはワグネルではありませんか？」

「さうです。國王の友だちだつた革命家です。聖徒ワグネルは晩年には食前の祈禱さへしてゐました。しかし勿論基督教よりも生活教の信徒の一人だつたのです。ワグネルの残した手紙によれば、娑婆苦は何度この聖徒を死の前に驅りやつたかわかりません。」

僕等はまだその時には第六の龕の前に立つてゐました。

「これは聖徒ストリントベリーの友だちです。子供の大勢ある細君の代りに十三四のタイテイの女を娶つた商賣人上りの佛蘭西の畫家です。この聖徒は太い血管の中に水夫の血を流してゐました。が、唇を御覽なさい。砒素か何かの痕が残つてゐます。第七の龕の中にあるのは……もうあなたはお疲れでせう。ではどうかこちらへお出で下さい。」

僕は實際疲れてゐましたから、ラツブと一しよに長老に従ひ、香の匂のする廊下傳ひに或部屋へはひりました。その又小さい部屋の隅には黒いヴェヌスの像の下に山葡萄が一ふさ獻じてあるのです。僕は何の裝飾もない僧房を想像してゐただけにちよつと意外に感じました。すると長老は僕の容子にかう云ふ氣もちを感じたと見え、僕等に椅子を薦める前に半ば氣の毒さうに説明しました。

「どうか我々の宗教の生活教であることを忘れずに下さい。我々の神、——『生命の樹』の教へは『旺盛に生きよ』と云ふのですから。……ラツブさん、あなたはこのかたに我々の聖書を御覽に入れましたか？」

「いえ、……實はわたし自身も殆ど讀んだことはないのです。」

ラツブは頭の皿を掻きながら、正直にかう返事をしました。が、長老は不相聲靜かに微笑して話しつづけました。

「それではおわかりになりますまい。我々の神は一日のうちにこの世界を巡りました。

『生命の樹』は樹と云ふものの、成し能はないことではないのです。(のみならず雌の河童を造りました。すると雌の河童は退屈の餘り、雄の河童を求めました。我々の神はこの歎きを憐み、雌の河童の脳髓を取り、雄の河童を造りました。我々の神はこの二匹の河童に『食へよ、交合せよ、旺盛に生きよ』と云ふ祝福を與へました。……』

河 僕は長老の言葉のうちに詩人のトツクを思ひ出しました。詩人のトツクは不幸にも僕のやうに無神論者です。僕は河童ではありませんから、生活教を知らなかつたのも無理はありません。けれども河童の國に生まれたトツクは勿論「生命の樹」を知つてゐた筈です。僕はこの教へに従はなかつたトツクの最後を憐みましたから、長老の言葉を遮るやうにトツクのことを話し出しました。

「ああ、あの氣の毒な詩人ですね。」

長老は僕の話聞き、深い息を洩らしました。

「我々の運命を定めるものは信仰と境遇と偶然とだけです。(尤もあなたがたはその

外に遺傳をお數へなさるでせう。)トツクさんは不幸にも信仰をお持ちにならなかつたのです。」

「トツクはあなたを羨んでゐたでせう。いや、僕も羨んでゐます。ラップ君などは、も若いし、……」

河 「僕も、嘴さへちやんとしておれば或は樂天的だつたかも知れません。」

長老は僕等にかう言はれると、もう一度深い息を洩らしました。しかもその目は涙ぐんだまま、ちつと黒いヴェヌスを見つめてゐるのです。

童 「わたしも實は、——これはわたしの祕密ですから、どうか誰にも仰有らずに下さい。——わたしも實は我々の神を信する訣に行かないのです。しかしいつかわたしの祈禱は、——」

丁度長老のかう言つた時です。突然部屋の戸があいたと思ふと、大きい雌の河童が一匹、いきなり長老へ飛びかかりました。僕等がこの雌の河童を抱きとめようとした

のは勿論です。が、雌の河童は咄嗟の間に床の上へ長老を投げ倒しました。「この爺め！ けふも又わたしの財布から一杯やる金を盗んで行つたな！」十分ばかりたつた後、僕等は實際逃げ出さないばかりに長老夫婦をあとに残し、大寺院の玄關を下りて行きました。

「あれではあの長老も『生命の樹』を信じない筈ですね。」暫く黙つて歩いた後、ラップは僕にかう言ひました。が、僕は返事をするよりも思はず大寺院を振り返りました。大寺院はどんより曇つた空にやはり高い塔や圓屋根を無数の觸手のやうに伸ばしてゐます。何か沙漠の空に見える蜃氣樓の無氣味さを漂はせたまま。……

## 十五

それから彼は一週間の後、僕はふと醫者のチャックに珍らしい話を聞きました。と

云ふのはあのトックの家に幽霊の出ると云ふ話なのです。其頃にはもう雌の河童はどこか外へ行つてしまひ、僕等の友だちの詩人の家も寫真師のステュデイオに變つてゐました。何でもチャックの話によれば、このステュデイオでは寫真をとると、トックの姿もいつの間にか必ず朦朧と客の後ろに映つてゐるとか云ふことです。尤もチャックは物質主義者ですから、死後の生命などを信じてゐません。現にその話をした時にも悪意のある微笑を浮かべながら、「やはり靈魂と云ふものも物質的存在と見えますね。」などと註釋めいたことをつけ加へてゐました。僕も幽霊を信じないことはチャックと餘り變りません。けれども詩人のトックには親しみを感じてゐましたから、早速木屋の店へ駆けつけ、トックの幽霊に關する記事やトックの幽霊の寫真の出でゐる新聞や雑誌を買つて來ました。成程それ等の寫真を見ると、どこかトックらしい河童が一匹、老若男女の河童の後にぼんやりと姿を現してゐました。しかし僕を驚かせたのはトックの幽霊の寫真よりもトックの幽霊に關する記事、——殊にトックの幽霊に關す

る心霊學協會の報告です。僕は可成逐語的にその報告を譯して置きましたから、下に大略を掲げることにしませう。但し括弧の中にあるのは僕自身の加へた註釋なのです。

詩人トツク君の幽霊に關する報告 (心霊學協會雜誌第八千二百七十四號所載)、わが心霊學協會は先般自殺したる詩人トツク君の舊居にして現在は××寫眞師のステュデイオなる□□街第二百五十一號に臨時調査會を開催せり。列席せる會員は下の如し。(氏名を略す。)

我等十七名の會員は心霊協會々々長ベック氏と共に九月十七日午前十時三十分、我等の最も信頼するメデイアム、ホツブ夫人を同伴し、該ステュデイオの一室に參集せり。ホツブ夫人は該ステュデイオに入るや、既に心靈的空氣を感じ、全身に痙攣を催しつつ、嘔吐すること數回に及べり。夫人の語る所によれば、こは詩人トツク君の強烈なる煙草を愛したる結果、その心靈的空氣も亦ニコチンを含むる爲なりと云ふ。

我等會員はホツブ夫人と共に圓卓を繞りて黙坐したり。夫人は三分二十五秒の後、極めて急劇なる夢遊状態に陥り、且詩人トツク君の心靈の憑依する所となれり。我等會員は年齢順に従ひ、夫人に憑依せるトツク君の心靈と左の如き問答を開始したり。

問 君は何故に幽霊に出づるか?

答 死後の名聲を知らんが爲なり。

問 君——或は心霊諸君は死後も尙名聲を欲するや?

答 少くとも予は欲せざる能はず。然れども予の邂逅したる日本の一詩人の如きは

死後の名聲を輕蔑し居たり。

問 君はその詩人の姓名を知れりや?

答 予は不幸にも忘れたり。唯彼の好んで作れる十七字詩の一章を記憶するのみ。

問 その詩は如何?

答 「古池や蛙飛びこむ水の音」。

問 君はその詩を佳作なりと做すや？

答 予は必しも悪作なりと做さず。唯「蛙」を「河童」とせん乎、光彩陸離たるべし。

問 然らばその理由は如何？

答 我等河童は如何なる藝術にも河童を求むること痛切なればなり。

會長ベック氏はこの時に當り、我等十七名の會員にこは心靈學協會の臨時調査會にして合評會にあらざるを注意したり。

問 心靈諸君の生活は如何！

答 諸君の生活と異なること無し。

問 然らば君は君自身の自殺せしを後悔するや？

答 必しも後悔せず。予は心靈的生活に倦まば、更にピストルを取りて自活すべし。

問 自活するは容易なりや否や？

トツク君の心靈はこの間に答ふるに更に問を以てしたり。こはトツク君を知れるものには頗る自然なる應酬なるべし。

答 自殺するは容易なりや否や？

問 諸君の生命は永遠なりや？

答 我等の生命に關しては諸説紛々として信すべからず。幸ひに我等の間にも基督教、佛教、モハメット教、拜火教等の諸宗あることを忘るる勿れ。

問 君自身の信する所は？

答 予は常に懷疑主義者なり。

問 然れども君は少くとも心靈の存在を疑はざるべし？

答 諸君の如く確信する能はず。

問 君の交友の多少は如何？

答 予の交友は古今東西に亙り、三百人を下らざるべし。その著名なるものを擧ぐれば、クライスト、マインレンデル、ワイニンゲル……

問 君の交友は自殺者のみなりや？

答 必しも然りとせず。自殺を辯護せるモンテエニユの如きは予が畏友の一人なり。唯予は自殺せざりし厭世主義者、——シヨオベンハウエルの輩とは交際せず。

問 シヨオベンハウエルは健在なりや？

答 彼は目下心靈的厭世主義を樹立し、自活する可否を論じつつあり。然れどもコレラも微菌病なりしを知り、頗る安堵せるものの如し。

我等會員は相次いでナポレオン、孔子、ドストエフスキイ、デアヴィン、クレオパトラ、釋迦、デモステネス、ダマテ、千の利休等の心靈の消息を質問したり。然れどもトック君は不幸にも詳細に答ふることを做さず、反つてトック君自身に關する種々のゴシップを質問したり。

問 予の死後の名聲は如何？  
答 或批評家は「群小詩人の一人」と言へり。  
問 彼は予が詩集を贈らざりしに怨恨を含める一人なるべし。予の全集は出版せられしや？  
答 君の全集は出版せられたれども、賣行甚だ振はざるが如し。

問 予の全集は三百年の後、——即ち著作権の失はれたる後、萬人の購ふ所となるべし。予の同棲せる女友たちは如何？  
答 彼女は書肆ラック君の夫人となれり。

問 彼女は未だ不幸にもラックの義眼なるを知らざるなるべし。予が子は如何？  
答 國立孤兒院にありと聞けり。

トック君は暫く沈黙せる後、新たに質問を開始したり。

問 予が家は如何？



答 某寫眞師のステュディオとなれり。

問 予の柩は如何になれるか？

答 如何なれるかを知るものなし。

問 予は予の机の抽斗に予の秘蔵せる一束の手紙を——然れどもこは幸ひにも多忙なる諸君の闘する所にあらず。今やわが心霊界は徐に薄暮に沈まんとす。予は諸君と訣別すべし。さらば。諸君。さらば。わが善良なる諸君。

ホップ夫人は最後の言葉と共に再び急劇に覺醒したり。我等十七名の會員はこの問答の眞なりしことを上天の神に誓つて保證せんとす。(尙又我等の信賴するホップ夫人に對する報酬は嘗て夫人が女優たりし時の日當に従ひて支辨したり。)

十六

僕はかう云ふ記事を読んだ後、だんだんこの國にゐることも憂鬱になつて來ました

から、どうか我々人間の國へ歸ることにはしたいと思ひました。しかしいくら探して歩いて、僕の落ちた穴は見つかりません。そのうちにあのバッグと云ふ漁師の河童の話には、何でもこの國の街はづれに或年をとつた河童が一匹、本を読んだり、笛を吹いたり、靜かに暮らしてゐると云ふことです。僕はこの河童に尋ねて見れば、或はこの國を逃げ出す途もわかりはしないかと思ひましたから、早速街はづれへ出かけて行きました。しかしそこへ行つて見ると、如何にも小さい家の中に年をとつた河童どこるか、頭の皿も固まらない、やつと十二三の河童が一匹、悠々と笛を吹いてゐました。僕は勿論間違つた家へはひつたではないかと思ひました。が、念の爲に名をきいて見ると、やはりバッグの教へてくれた年よりの河童に違ひないのです。

「しかしあなたは子供のやうですが……」

「お前さんはまだ知らないのかい？ わたしはどう云ふ運命か、母親の腹を出た時には白髪頭をしてゐたのだよ。それからだんだん年が若くなり、今ではこんな子供にな

つたのだよ。けれども年を勘定すれば生まれる前を六十としても、彼は百十五六にはなるかも知れない。」

僕は部屋の中を見まはしました。そこには僕の氣のせぬか、質素な椅子やテーブルの間に何か清らかな幸福が漂つてゐるやうに見えるのです。

河 「あなたはどうもほかの河童よりも仕合せに暮らしてゐるやうですな？」

「さあ、それはさうかも知れない。わたしは若い時は年よりだつたし、年をとつた時は若いものになつてゐる。従つて年よりのやうに慾にも渴かず、若いもののやうに色にも溺れない。兎に角わたしの生涯はたとひ仕合せではないにしろ、安らかだつたのには違ひあるまい。」

童 「成程それでは安らかでせう。」

「いや、まだそれだけでは安らかにはならない。わたしは體も丈夫だつたし、一生食ふに困らぬ位の財産を持つてゐたのだよ。しかし一番仕合せだつたのはやはり生まれ

て來た時に年よりだつたことだと思つてゐる。」

僕は暫くこの河童と自殺したトックの話だの毎日醫者に見て貰つてゐるゲエルの話だのをしてゐました。が、なぜか年をとつた河童は餘り僕の話などに興味のないやうな顔をしてゐました。

河 「ではあなたはほかの河童のやうに格別生きてゐることに執着を持つてはゐらないのですな？」

童 年をとつた河童は僕の顔を見ながら、靜かにかう返事をしました。

「わたしもほかの河童のやうにこの國へ生まれて來るかどうか、一應父親に尋ねられてから母親の胎内を離れたのだよ。」

「しかし僕はふとした拍子に、この國へ轉げ落ちてしまつたのです。どうか僕にこの國から出て行かれる路を教へて下さい。」

「出て行かれる路は一つしかない。」

「と云ふのは？」

「それはお前さんのここへ来た路だ。」

僕はこの答を聞いた時になぜが身の毛がよだちました。

「その路が生憎見つかからないのです。」

年をとつた河童は水々しい目にちつと僕の顔を見つめました。それからやつと體を起し、部屋の隅へ歩み寄ると、天井からそこに下つてゐた一本の綱を引きました。すると今まで氣のつかなかつた天窓が一つ開きました。その又圓い天窓の外には松や檜が枝を張つた向うに大空が青あをど晴れ渡つてゐます。いや、大きい鐵に似た鎗ヶ岳の峯も聳えてゐます。僕は飛行機を見た子供のやうに實際飛び上つて喜びました。

「さあ、あすこれから出て行くが好い。」

年をとつた河童はかう言ひながら、さつきの綱を指さしました。今まで僕の綱と思つてゐたのは實は綱梯子に出来てゐたのです。

「ではあすこれから出さして貰ひます。」

「唯わたしは前以て言ふがね。出て行つて後悔しないやうに。」

「大丈夫です。僕は後悔などはしません。」

僕はかう返事をするが早いか、もう綱梯子を攀ち登つてゐました。年をとつた河童の頭の皿を遙か下に眺めながら。

十七

僕は河童の國から歸つて来た後、暫くは我々人間の皮膚の匂に閉口しました。我々人間に比べれば、河童は實に清潔なものです。のみならず我々人間の頭は河童ばかり見てゐた僕には如何にも氣味の悪いものに見えました。これは或はあなたにはおわかりにならないかも知れません。しかし目や口は兎も角も、この鼻と云ふものは妙に恐しい氣を起させるものです。僕は勿論出来るだけ、誰にも會はない算段をしました。

が、我々人間にもいつか次第に慣れ出したと見え、半年ばかりたつうちにどこへでも出るやうになりました。唯それでも困つたことは何か話をしてゐるうちにうっかり河童の國の言葉を口に出してしまふことです。

「君はあしたは家におるかね？」

「Ques」

「何だつて？」

「いや、ゐると云ふことだよ。」

大體かう云ふ調子だつたものです。

しかし河童の國から歸つて來た後、丁度一年ほどたつた時、僕は或事業の失敗した爲に……

「S博士は彼がかう言つた時、「その話はおよしなさい」と注意をした、何でも博士の話によれば、彼はこの話をする度に看護人の手にも了へない位、亂暴になるとか云

ふことである。」

ではその話はやめませう。しかし或事業の失敗した爲に僕は又河童の國へ歸りたいと思ひ出しました。さうです。「行きたい」のではありません。「歸りたい」と思ひ出したのです。河童の國は當時の僕には故郷のやうに感ぜられましたから。

僕はそつと家を脱け出し、中央線の汽車へ乗らうとしました。そこを生憎巡査にかまひ、とうとう病院へ入れられたのです。僕はこの病院へはひつた當座も河童の國のことを想ひつづけました。醫者のチャックはどうしてゐるでせう？ 哲學者のマツグも不相復七色の色硝子のランタアンの下に何か考へてゐるかも知れません。殊に僕の親友だつた、嘴の腐つた學生のラツプは、——或けふのやうに曇つた午後です。こんな追憶に耽つてゐた僕は思はず聲を擧げようと思ひました。それはいつの間にはひつて來たか、バッグと云ふ漁師の河童が一匹、僕の前に佇みながら、何度も頭を下げてゐたからです。僕は心を取り直した後、——泣いたか笑つたかも覚えてゐません。

が、兎に角久しぶりに河童の國の言葉を使ふことに感動してゐたことは確かです。

「おい、バッグ、どうして来た？」

「へい、お見舞ひに上つたのです。何でも御病氣だとか云ふことですから。」

「どうしてそんなことを知つてゐる？」

「ラテイオのニウスで知つたのです。」

バッグは得意さうに笑つてゐるのです。

「それにしてもよく來られたね？」

「何、造作はありません。東京の川や堀割りには河童には往來も同様ですから。」

僕は河童も蛙のやうに水陸兩棲の動物だつたことに今更のやうに氣がつかしました。

「しかしこの邊には川はないがね。」

「いえ、こちらへ上つたのは水道の鐵管を抜けて來たのです。それからちよつと消火

栓をあけて……」

「消火栓をあけて？」

「旦那はお忘れなすつたのですか？ 河童にも機械屋のゐると云ふことを。」

それから僕は二三日毎にいろいろの河童の訪問を受けました。僕の病はS博士によれば早發性痴呆症と云ふことです。しかしあの醫者のチャックは（これは甚だあなた

にも失禮に當るのに違ひありません。）僕は早發性痴呆症患者ではない、早發性痴呆

症患者はS博士を始め、あなたがた自身だと言つてゐました。醫者のチャックも來

る位ですから、學生のラップや哲學者のマジグの見舞ひに來たことは勿論です。が、

あの漁師のバッグの外に晝間は誰も尋ねて來ません。殊に二三匹一しよに來るのは

夜、——それも月のある夜です。僕はゆうべも月明りの中に硝子會社の社長のゲエル

や哲學者のマジグと話をしました。のみならず音楽家のクラバックにもヴァイオリン

を一曲弾いて貰ひました。そら、向うの机の上に黒百合の花束がのつてゐるでせう？

あれもゆうべクラバックが土産に持つて來てくれたものです……（僕は後を振り返つ

て見た。が、勿論机の上には花束も何ものつてゐなかつた。

それからこの本も哲學者のマックがわざわざ持つて来てくれたものです。ちよつと最初の詩を読んで御覽なさい。いや、あなたは河童の國の言葉を御存知になる筈はありません。では代りに読んで見ませう。これは近頃出版になつたトックの全集の一冊です。――

(彼は古い電話帳をひろげ、かう云ふ詩をおほ聲に読みはじめた。)

――椰子の花や竹の中に

佛陀はとうに眠つてゐる。

路ばたに枯れた無花果と一しよに

基督ももう死んだらしい

しかし我々は休まなければならぬ  
たとひ芝居の背景の前にも。

(その又背景の裏を見れば、繼ぎはぎだらけのカンヴァスばかりだ?)――

けれども僕はこの詩人のやうに厭世的ではありません。河童たちの時々来てくれる限りは、――ああ、このことは忘れてゐました。あなたは僕の友だちだつた裁判官のペップを覚えてゐるでせう。あの河童は職を失つた後、ほんたうに發狂してしまひました。何でも今は河童の國の精神病院にゐると云ふことです。僕はS博士さへ承知してくれれば、見舞ひに行つてやりたいのですがね……。

(昭和二年二月十一日)

2287

昭和八年三月一日 印刷  
昭和八年三月五日 第二刷發行  
昭和二十一年四月五日 印刷  
昭和二十一年四月十日 第十四刷發行



岩波文庫 河童

(定價販賣嚴行)  
定價二圓五十錢(稅共)

著者 芥川龍之介

發行者 東京都神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波茂雄

印刷者 東京都王子區稻付町一丁目二〇八番地 大野治輔

發行所

東京都神田區一ツ橋二ノ三

岩波書店

配給元

東京都神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

小店の發行人に際し何等かの條件により定價以上の不當なる要求をせられたる場合には具體的に御内報を願ひます

本製井永・刷印葉二

讀書子に寄す

岩波茂雄

岩波文庫刊に願して

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。當ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと躊躇する全集が其編輯に高金の用意をなしたるか。千古の典籍の編纂企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を購得して數十冊を強ふるが如き、果して其相當する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、従來の方針の微塵を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は絶をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て速次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を採したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の便宜を最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては厳選最も力を盡し、岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、つて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうらはしき共同を期待する。

昭和二年七月



F13  
A39  
11



終

